

社会人に受けて
いただきました

インタビュー VRT×料理人



料理人

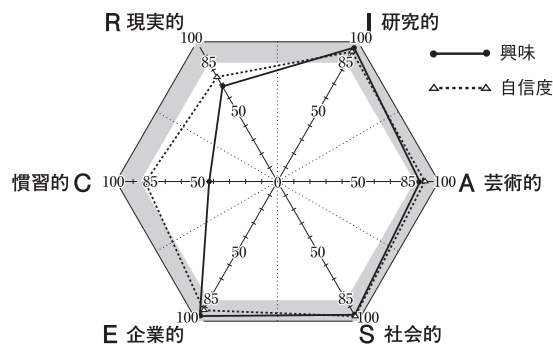
「旬香みつや」店主

こながみつ

小長光史也さん(41歳)

高校の調理科を卒業後、数店で日本料理を修業。ノルウェーとチェコで公邸料理人を経験。帰国後の2008年に「旬香みつや」を開店。食材は国産にこだわり、勝沼ワインとも相性がよい和食が堪能できる。

興味(A検査)と自信(C検査)の六角形



小長光史也 の 職業レディネス 判定

- 興味が強い職業領域
1位: I 研究的職業領域
1位: E 企業的職業領域
3位: S 社会的職業領域
- 自信が強い職業領域
1位: S 社会的職業領域
2位: I 研究的職業領域
3位: E 企業的職業領域
A 芸術的職業領域

興味が特に強いのは、Iの研究的職業領域(研究や考える仕事)とEの企業的職業領域(新しい企画を考えたり、組織を動かすような仕事)、Sの社会的職業領域(人に接したり、奉仕的な仕事)の3領域である。これらの興味・関心は「自分の店をもつ」という働き方の中に活かされている。

自信については、全体的に高い傾向にある。店に関わるすべての仕事で一人に対応される中で、興味の有無に関係なく、自信が培われている。基礎的志向性は、D(対情報志向)、P(対人志向)、T(対物志向)の順に興味の傾向が強く、中でも特に好奇心の強さと人の役に立ちたいという気持ちが強く表れている。

母親が料理好きで、小長光さんは小学生の頃から料理に興味があった。パスタや麻婆豆腐などを作ると、その出来が家族に好評だったという。中学時には将来は料理の仕事に携わりたいたい、高校は調理科に進学する。卒業後に銀座の割烹料理屋に就職、その後30歳までに5店ほどで修業を積む。そして30歳の時、夢だった海外での仕事のチャンスをつかみ、ノルウェー、チェコの日本大使館での公邸料理人を担当。7年ほど赴任する中で「もっとこっちにいたい」との気持ちもあったが、ちょうどその頃子どもが生まれたこともあって「自分の店をもちたい」と

いう目標を実現させるには、今がよいのではないかと、この思いも募り、帰国。2008年に現在の店をオープン。旬の素材を活かした和食の店として、食通の常連たちの舌を楽しませている。週に2〜3回は朝6時に家を出て築地へ仕入れに行き、戻るとすぐに仕込みに入る。水・土曜はランチもやっていて夜も10時半まで営業するので、睡眠時間が短くなりがちだが、小長光さんは、「自分が供する料理とお酒で、お客様にほっとしていただく。その時間を楽しんでいただければ何より嬉しいです。この仕事は人に『いい時間』を提供することではないかと思

います」という。逆に厳しい点としては、「自分がしっかりしていないといけないので、健康など自己管理には気をつけなければなりません。また、最近環境の変化の影響なのか魚や野菜など仕入れられる食材の幅も以前より狭まってきたような気がします。今後が心配ですね」。

お客様への対応にも常に心を配る。「アレルギーがあればその素材を避けるのはもちろん、何度も足を運んでくださる方には前回と違った献立を入れてコースをアレンジします」

料理人を目指す若い人も多いが、「例えば自分の店をもつという目標を設定すれば、挫折そうになってもそこに向かって頑張ることができないのではないかと思います。誰かが何かをやってくれるわけでもないし、自分でしっかりしないと目標には近づけない。自分次第という部分が大きいですが、やればやっただけ得ることができるのではないのでしょうか」。

VRTの結果を見ると、研究的、芸術的、社会的、企業的の各職業領域にかなり強い興味が表れている。それは、自分だけで店の経営を担うためには、仕入れ、料理の創作から、お客様への対応や経理的な管理まで、幅広い範囲の要素が求められることを示しているようだ。



コピーライター

(株) プランダム

丸山智子さん (28歳)

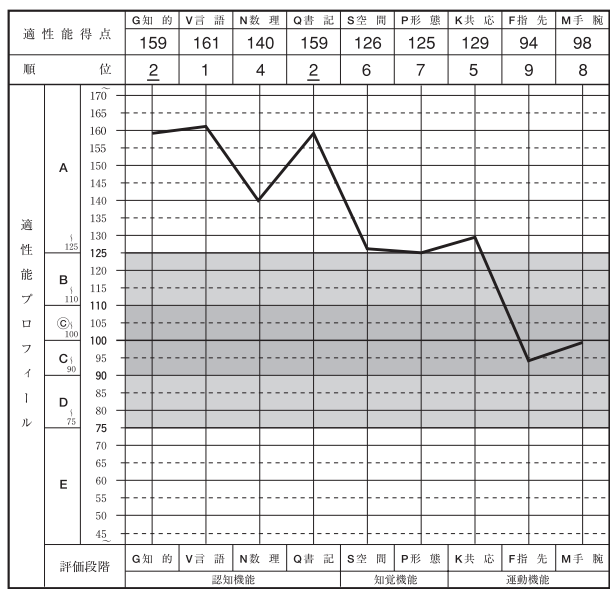
大学の法学部政治学科を卒業後、出版社での編集業務を約1年経験。不動産広告制作会社に移り、アシスタントを経てコピーライターに。3年勤務の後、2010年3月より現在の会社にコピーライターとして勤務。

社会人に受けて
いただきました

インタビュー

GATB
×コピーライター

適性得点と評価



丸山さんの 職業適性 判定

● 得点が高く出ている適性能力

- 1位: V 言語能力
- 2位: G 知的能力 / Q 書記的知覚
- 4位: N 数理能力

● 適性能力が活かせると思われる職業例

VGQ: 新聞記者、コピーライター、インストラクター、教員 等
VGN: マーケティングリサーチャー、イベントプランナー、人文科学系研究者 等

コピーライターの仕事に必要とされる、言語的な理解力や言語を使いこなす「言語能力」、新しいアイディアを生み出すのに必要な「知的能力」が高く、「文字や数字の理解力が特に優れている」という特徴が見られる。仕事を通して、それらの能力にますます磨きがかかると思われ、また「数理能力」も高いため、将来的には企画等、職域を広げていける可能性も秘めている。

大学時代、学園祭の実行委員を務めた丸山さんは、宣伝活動などに携わるうち、言葉によって人に楽しさを伝えることの魅力を知る。コピーライターとして働きたいと就職活動に取り組んだが、就職難の買い手市場の年でもあり、ほとんど全滅。

「卒業後5月になってやっとある出版社に入りました」

編集プロダクション業務も行っていたその会社では、編集を中心に取材や原稿執筆などの仕事をする。多少近い職種かと思って入社したが、丸山さんのやりたいコピーライターの仕事とは

違っていた。1年後、やはり希望の職種に就きたい気持ちで募り、不動産関係専門の広告制作会社にアルバイトとして入り、1年半のアシスタントの後コピーライターとなる。そして経験を積む中で、他業界のライティングへの意欲も高まっていたところに、会社事情も重なり退職。

そういった中でも丸山さんは自己研鑽を続けていた。

「コピーライターの講座などには通っていました」

そして2010年3月、広告代理店である(株)プランダムに入社。コピーラ

イティング、企画づくり等にあたっている。

厚生労働省編一般職業適性検査(GATB)の結果は、全体的に得点が高く、特に知的能力、言語能力、書記的知覚に優れ、コピーライターの所要基準点を完全に満たしていた。

「今まで好きだから、というだけでこの分野の仕事に関わってきましたが、能力適性の面でも裏づけをもらったような気がしてよかったです」

昔から文章を書くことが好きではあったが、こういった形で客観的な指標を得ることはあまりなかったという。

「私自身、社会人として5年ほど経験してきて思うのですが、キツイ仕事でも、好きなことなら頑張れるのではないのでしょうか。また、これまでのすべての経験は何らかの形で現在につながっていて、無駄なものはないかなと思いますね」

小さい頃は手製の壁新聞を自作したり、最近ではブログに書いた趣味の演劇評が知人の目に留まり、寄稿を依頼されたりしているという丸山さんは、言葉を推敲して文章を書くことで人に伝えるという仕事に根っこからお好きなようにお見受けした。

(「職業研究」2010春季号より)